

この意思是父親の子に対する願望です。まず、父親は「子に両親が結婚していない子どもを育ててはいけない。」と言いました。つまり、婚外子のことです。それから、「妹を慈悲のない人々のところに嫁がせてはいけない。ある人は財産を持っているかもしれないが、慈悲がなかったりする。」そして、3つめに「妻に秘密を言ってはいけない。」と言いました。これらが3つのことです。さて、これはアブヌワスの話の中のある話です。しかし、千夜一夜の話の中にも他の話で王が人々の話に出くわすものがあります。

夜、王が通った時に3人の子どもが遊んでいました。彼らはただ座ってあそんでいるだけでした。1人の子どもが言いました。「パンと肉のスープはおいしい。」もう1人が言いました。「いや、王のところのパンがおいしい。」するともう1人がいいました。「いいや違う。嘘がおいしい。」というのも、パンと肉のスープがおいしいと言った子はバニアニだったのです。バニアニは肉を食べません。王は大変驚きました。翌朝、王は兵を呼び出しました。「こういうことを言った3人の子どもがいる。なぜだ。」さて、その子が呼ばれ質問されました。「なぜそう言ったのだ。」その子はいいました。「パンと肉を食べて食堂から出てくる人々は翌日もそれらを買いに戻ってきます。ということは、それらがおいしいということです。」「お前は食べていないのだろう。お前はバニアニだ。」「はい。でも、おいしいんです。」「お前は肉を食べないだろう。」このバニアニの子についてはもう用はありませんでした。「次はお前だ。」王は言いました。「彼は、間違いなく王の物は全てが素晴らしいと言った。つまり、王のところでつくられるものは全て素晴らしいということになる。では、お前はなぜ嘘がおいしいと言ったのだ。」その子は王に言いました。「私に1,000 ディナールください。そして、2、3週間後になぜ嘘がおいしいのか答えに来ます。」王は同意しました。彼に渡しました。そして、子どもは家に帰って行きました。家の外側まで来ました。彼は彼の小屋をわらで葺きにし、前の方に人が通れるくらいのスペースを少しだけ残して全てこのような小屋のようにわらで葺いてしまいました。そして閉じました。大きな壺を置いてその中に炭を入れました。香をたくさん持ってきて家中を香でいっぱいにしました。彼自身はカンズを着てひげなどを付けお祈り用のマットの上に座り、後ろの方に小さな小屋を建てそこに彼の食事を置きました。人々が通ると「どこの賢い老人ですか。」と彼に聞きました。尋ねられても彼は答えません。彼はただ祈っているだけです。「神がその中に降りられた。」「小屋の中にいるのですか?」「ええ。もし何か問題があって神に会いたいのなら中に入ってもいいですよ。中に行くと彼に会えます。あなたの問題を神にお願いするといいい。」「ええ。私は行きたいです。」「しかし、避けられないことがある。もし、あなたが非嫡出の子、つまりあなたの母親が不実を行った結果、婚外の子として生まれた子である場合、あなたは神を見ることはできません。しかし、あなたが嫡出の子である場合、神を見ることができます。小屋から出てきた時はあなた次第でささげ物を出してください。」そこで、その人は中に入りました。煙ばかりで何も見えませんでした。小屋の中に煙が充満し彼には何も見えません。彼は外に出ました。「神と会えましたか。」「神に会えました。」彼はお金をとってそこへ置きました。こうして、町中である場所にある小屋の中に神が降りたという噂が広まるまで続けられました。そして人々がやってきました。彼らは中に入って言って何も言いません。入って行く人みな、誰もいなかったとは言いません。中に入って行く全ての人々が誰にも会うことなく外に出てきます。そしてついある朝、王がやってきました。噂は聞いていたのですがまだ来ていなかったのです。その子は黙っていました。王はその人が例の彼だとは気が付きませんでした。その子は中に入ると火と煙を十分に焚きました。そして王を

中に通しました。王は中に入って行きました。王は外へ出ると「おかげさまで会うことができました。」と感謝しました。しかし実際には煙で何も見えなかったのです。彼はお金の入った袋を取り出しそこに置きました。王は家に帰り、家に着くと母親のところへ行きました。「あなたは父に対して不実を行っていたのですね。この人は私の父親ではない。私の父親は一体誰ですか。」母親は言いました。「私はやっていない。」王は言いました。「そんなことはありえない。人々はみなあそこに行って神に会った。私は会えなかったのだ。私は恥ずかしくて会えなかったとは言えなかった、会えたと言ったのだ。あなたは父親に対して裏切る行為をしていたのですね。」王は母親を捕らえ中に閉じ込めました。あの子どもは王がそこに来たのを見てから全てのを壊し取り除き、きれいに片づけてから去りました。彼は（王のところへ）行きました。（王は聞きました。）「どうした。」彼は言いました。「嘘がおいしいという話について答えに来ました。」「ほほう。」「でも、彼女はどこですか。あなたの母上に会いたいのですが。」「私の母は遠くにいる。」彼は言いました。「いや、ここに連れてきてください。違うのです。彼女はそんなことはできない。決してできない。私はあなたに嘘がおいしいと言いました。みながあ的小屋に神を見にやってきましたが神には会えなかった。しかし出てくると神を見たと言いました。あなたも神をみたと言いましたが見ていないでしょう。そしてその結果あなたはあなたの母親にあなたに告白するよう拷問した。中には神なんていなかったのです。私は中に火を焚いていたのです。私です。私にバケツをください。私は玄関先に置かれたお金の袋を持ってきました。人々は神をみたお礼にとやってきました。」王は言いました。「この子は知恵を使った。彼がいうことには、人々がこれぞ真実だということを感じている場合、真実を含んだ嘘が嘘からうまれるのだ。単なる嘘なのだ。彼は神を信じるということの意味したわけではなかった。一体神がどうやってそこへ降りてくるというのだ。それに中に入るとなぜ煙だけが見えたのだ。人などいない、何もないと勇気を出して言った人は一人もいなかった。」